

| | | | |
|--------------------|--|--------------------------|----------------------------|
| 開講年度 | 令和 8 年度 | 開講課程 | 博士課程 |
| 授業名 | 病理病態学特論B | | |
| 開講キャンパス | 紀三井寺 | 教室 | 基礎教育棟 3 階講義室 3 中講義室 303 |
| 科目区分 | 専門科目 | 配当年次 | 1 年次 |
| 必修・選択の別 | 選択 | 単位 | 1 単位 |
| 対象学生 | — | 使用言語 | 日本語 |
| キーワード | がん転移、がん遺伝子、病理学、病理診断 | | |
| 担当教員 (下線：科目責任者) | 医 | 准教授 小島史好、講師 及川恒輔、講師 中西雅子 | |
| | 薬 | | |
| 授業の概要 | 様々な疾患について病理学に関する高度な知識を修得するとともに、基礎病理学的研究及び診断病理学的研究の手法を身につけ、疾患の診断や治療に応用できる高度な研究能力を培う。 | | |
| 到達目標 | <input type="checkbox"/> がんについて病理学的な基礎知識を修得する。 <input type="checkbox"/> がん遺伝子の機能を理解し、分子標的治療の基本的なメカニズムや開発の現状を理解する。 <input type="checkbox"/> 病理学総論的知識を修得する。 <input type="checkbox"/> HE標本により一般的な疾患の病理診断ができる。 <input type="checkbox"/> 適切な特殊染色と免疫染色の選択ができる。 <input type="checkbox"/> 分子病理学的解析手法を理解し、診断への応用ができる。 | | |
| 授業計画 | <p>1. 2. 病理学概論 ～総論及び研究手法～ (小島史好 / 2 回) 【7/21 6限・7限】 様々な疾患における細胞・組織の変化や異常について、その特徴や形成機序、および病理発生や臨床の関心の観点から病理総論的な講義を行う。病理総論を概説した上で、病理学的研究に用いられる手法のうち、細胞や組織内で分子を視覚化する手法や蛍光特性を用いた手法を解説する。</p> <p>3. 4. 実地的な病理診断の修得 (小島史好 / 2 回) 【7/28 6限・7限】 病理診断の実地的な進め方について解説する。</p> <p>5. 6. がん遺伝子と分子標的治療 (及川恒輔 / 2 回) 【9/1 6限・7限】 様々なタイプのがん遺伝子について概説し、がん遺伝子やその下流分子を標的とした分子標的治療開発の実際について考察する。</p> <p>7. がんに関する基礎的知識 (中西雅子 / 1 回) 【9/8 6限】 病理学的な観点から腫瘍学の総論を概説する。</p> <p>8. がん転移の分子メカニズムと基礎研究 (中西雅子 / 1 回) 【9/8 7限】 臓器特異的な転移として骨転移に着目し、基礎研究及び臨床的な側面について解説する。</p> | | |
| 授業の方法・形態 | 講義を中心とする。 遠隔会議システムを利用した同時配信を行う。 | | |
| 使用するメディア | パワーポイント等によるスライド資料を使用する。 | | |

| | |
|-------------------------|---|
| 成績評価の基準 | 授業への取組20%（発問に対する応答や発言内容、主体的・積極的な受講姿勢）及びレポート80%によりS（90点以上）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、D（59点以下）の5段階で評価し、C以上を合格とする。 |
| 授業時間外の学修に関する指示 | 教科書・参考書が指定されている場合は予習を行うとともに、各回終了後には復習を行うこと。そのほか、各担当教員の指示に従うこと。 |
| オフィスアワー（学生からの質問事項等への対応） | 担当教員により異なるため、希望する場合はメール又は電話により予約すること。 |
| 教科書・参考書 | <p>【教科書】 授業計画1・2 「Robbins & Cotran Pathologic Basis of Disease」(2023) 著者：V. Kumarら 出版社：Elsevier</p> <p>授業計画3～8 特に指定しないが、担当者が作成した資料を配布する。</p> <p>【参考書】 授業計画3・4 「標準病理学」 編集：北川昌伸 出版社：医学書院 「外科病理学」 著書：深山正久、森永正二郎 出版社：文光堂</p> |